

日本作業療法研究学会雑誌

Japanese Journal of Occupational Therapy Research

2018.Vol.21. No.1

巻頭言

- 新生研究室の生き残り戦略

李 範爽

原著

- 標準型車椅子とモジュラー車椅子の座り心地の差異に関する質的研究

亀ヶ谷忠彦 1

- 作業療法士における職業的アイデンティティと

キャリア・アダプタビリティの関係

石倉 健一 11

- 外来リハビリテーション長期利用者における通院継続の理由に関する研究

—テキストマイニングによる利用者アンケートの分析—

村仲隼一郎 17

- Box and Block Test (BBT) の信頼性の検討

—ブロック数と並べ方での比較—

伊藤 公一 23

- 手掌アーチの変化と手掌形状の変化との関係

—手掌アーチの重要性の探索—

車谷 洋 29

実践報告

- 拮抗失行症例に対する動作の細分化と

聴覚・視覚的フィードバックを用いた更衣動作獲得に向けた関わり

鈴木 雄介 37

日本作業療法研究学会雑誌投稿・執筆規定

43



日本作業療法研究学会

The Japanese Society of Occupational Therapy Research

新生研究室の生き残り戦略

群馬大学大学院 保健学研究科 李 範爽



来日21年目を迎える。留学先として日本を選んだ理由は「留学生10万人計画」であり、作業療法を選んだ理由は「病院と社会をつなぐ」という職業紹介だった。群馬大学を選んだ理由を聞かれることも多い。日本語学校学生の時、関東地方にあるOT養成校に手書きの手紙を出し、留学生受験について問い合わせたところ、唯一返事もらったのが群馬大学だった。返事をして下さったのは事務方であった。

研究生活16年目を迎える。学部卒業後すぐ大学院に進学、空間認知に関する研究を始めた。脳磁図(MEG)を用いて、健常成人において左下視野に提示された視覚情報の頭頂葉到達潜時が他の3視野(右上、右下、左上)より延長することを確認した。小さな発見ではあったが、何とか英語論文にまとめ、博士号取得もできた。その後は上肢運動機能へ研究領域を移した。パソコン画面に映し出される加速度計や筋電、感圧センサーの波形を見ている時の安心感や知的興奮が好きだった。機材の持ち運びやすさが臨床研究の重要要素であるとの認識もあった。

研究室を立ち上げて4年、今なお研究戦略に悩む。研究室を立ち上げ、院生を受け入れた以上自分の好きなことだけを続ける訳にはいかない。研究室は研究の場であると同時に、人材育成の場でもある。研究室が目指す人材像、具体的な目標を提示し、そこに魅力を感じた人が集まり、彼らが次のステップに進むという良い循環体制を構築する必要がある。「自分の限られた力でどこまでその理想が達成できるか」と不安になる。

当研究室が目指す人材像と実践を紹介したい。①人材像：高いマネジメント力と国際競争力を持つ人材、②研究力はImpact factor2.0を目指し、それ以上は望まない。高い研究力だけに集中するより、多様な価値に触れ総合力を高める。③英語の勉強を徹底する。週1回の勉強会では文型(S・V・O・C)から学び直し、年1回のTOEIC受験を義務付けている。TOEIC受験は学生のモチベーション維持に以外と効果大きい。④学会発表は英語でのoral presentationを目指す。卒業研究生も卒研成果発表会において一部英語で発表している。⑤広く統計手法を学ぶ。研究室内で基礎・応用・指導の3段階に分け、毎年自己評価を行っている。⑥イベントの企画・統括を経験してもらう。自ずとマネジメント力が高まる。そしてまだ実現していないが、⑦大学院生を海外に積極的に送り出す予定である。長期研修やinternship、進学を通して院生の国際競争力を高めることこそが新生、中小研究室が生き残れる戦略であると考え。

ミッションの再定義や研究大学強化、大学の統廃合や専門職大学など様々な改革が行われている。生き残りの戦略は何か。一言でいけば、既存の順位付けから果敢に脱却し、自分の能力を踏まえ、自分だけの価値が生み出せるかがカギであると考え。新生という修飾語がとれた時、「この道でよかった」と思えるよう、日々努力していきたい。